

国際児童文学という視点からの読書指導

足立 幸子

Teaching of Reading from the Viewpoint of International Children's Literature

Sachiko ADACHI

教育学部言語文化コミュニケーション講座

1. はじめに

OECD が行った国際学習到達度調査 PISA 以来、フィンランドをはじめとして、外国の読むことの教育が耳に入るようになってきた。しかし、日本の国語科教育が「国際的になる」ということがどういうことを意味しているのか、十分に論じられたものは見当たらない。筆者も、これまでスペインの「読書へのアニメーション」やアメリカの「リテラチャー・サークル」など、比較研究的手法を用いて読書指導の研究を行ってきたりした。しかし、このようなことがどのような意味を持っているのか、本格的に論じたことはなかった。

そこで本稿では、「国際児童文学」という視点から、外国に関連した読書指導について考えてみることを目的とする。それは、単純に、自国の国語教育を改善するという枠を超え、グローバル・シチズンを育てるといった意味合いを帯びてくるものになるかもしれない。

本稿は筆者の読書指導研究において「国際児童文学」を提示する最初の論文になるので、その定義や意味付けを論じ、翻訳の問題を取り上げたのち、戦争児童文学という 1 つのジャンルを例として、この視点に基づいた読書指導の実際を考察する。

2. 国際児童文学とは何か

(1) 国際児童文学の定義

国際児童文学(international children's literature)とは、Tomlinson(1998)によれば、自国以外の国の子供のために、その国の言葉で書かれ、その国で出版され、のちに自国で出版された本のことであり、散文、韻文、フィクション、ノンフィクションなど、すべてのタイプのもが含まれる。アメリカの研究者 Tomlinson は、アメリカの子供達にとっての国際児童文学には、次の 3 つがあるという。

- ①もとは英語以外の言語で書かれ、英語に翻訳されたもの（例えばヨハンナ・スピリの「ハイジ」は、ドイツ語で書かれスイスで出版された）
- ②もとの言語は英語で書かれているが、アメリカ以外の国のもの（例えばジェームス・バリの「ピーター・パン」は、もとはイングランドで出版された）
- ③アメリカ以外の国で英語以外の言語で書かれて出版されたもので、アメリカでそのもとの言語で出版されたもの（例えば、アントワーヌ・ド・サン＝テグジュペリの「星の王子さま」は、フランス語で書かれフランスで出版された）

現在の日本においては②に属するものはほとんどないかもしれないが、同じ言語を複数の国で用いている場合は、このようなことが起こる。当然のことながら、絵本なども、これに含めて考えることができよう。諸外国で紹介されている日本について書かれた(彼らにとっての)国際児童文学として、マンガ(manga, graphic novel, comic などいろいろと呼び方がある)が挙げられる。特に最近では、アニメーションなども視野に入れていく必要があるのかもしれない。

(2) 国際児童文学の読書指導上の意義

国際児童文学が子供にとってもつ意義としては、

- ①それが他国（あるいは世界）の有り様を知る「窓」となること
- ②それが自国（あるいは自分）の有り様を見直す「鏡」となること

の2点が考えられる。外国で生まれた子供の本は何でも国際児童文学になりうるわけだが、特にこの2点を考慮すると、何かしらその国の文化的な要素を持っていることが重要であろう。このことは、何もステレオタイプ的な文化を含むことが望ましいと言っているわけではない。1つ例をあげながら、そのことを説明してみたい。

スペインの人気作家ジョルディ・シエラ・イ・ファブラによる『ビクトルの新聞記者大作戦』（宇野和美訳、ヒロナガシンイチ絵、1998年、国土社刊、以下「ビクトル」とする）には、ガウディの建築が出てくるわけでもなく、フラメンコのダンサーが出てくるわけでもない。ビクトルという小学校6年生の少年が、仲間を募って、町の情報を集め、新聞を発行するという話である。ところが、これを、日本の那須正幹によるズッコケ三人組シリーズの1冊『とびだせズッコケ事件記者』（前川かずお画、1986年、ポプラ社刊、以下「ズッコケ」とする）と比べて読んでみると、私達はスペインと日本の子供達が置かれている状況の違いに驚かされるのである。

「ビクトル」の方は、新聞をつくらうと決心するのは、ビクトル自身である。ビクトルは作家志望で、ある日学校を訪問したある作家のアドバイスで、新聞を作ろうときめる。ビクトル自身が親友を誘い、新聞記者を応募し、これまであまり親しくなかった小学生が、新聞づくりに参加してくるという形だ。支援してくれる大人はいない。ワインを水増ししているバル（bar、スペインの居酒屋・喫茶店）とか、飼い犬に道路で用足しをさせている人の話とか、妊娠検査薬を買いにきた女の子たちのこととか、新しいスーパーマーケットにおさされている古い商店街の店のことだとか、子供っぽいが確実に社会の現実をとらえた記事を載せて、新聞は発行される。結果として、新聞は大人に飛ぶように売れる。

一方「ズッコケ」の方は、学校で壁新聞を作るという学習活動が行われる。その活動は班ごとということで、登場人物のハチベエ、ハカセ、モーちゃんはそれぞれの班が発行する新聞の事件記者になるという設定だ。学校の活動であるから、町の人も警察も親切に協力的に応じる。取材する事件と言えば、あるおばさんが見間違っただと思っただ商店街のチラシのことや、担任の宅和先生のお嬢さんと隣のクラス担任の長井先生の恋愛のスクープや、2つの菓子屋のケーキはどちらがおいしいかといったことである。

どちらの話がよいと言っているわけではない。ただ、「ビクトル」を読んでみることで、私達は「ビクトル」を鏡として、日本の子供達の活動が学校で与えられたものになっていること、学校での活動であるからコミュニティの皆が子供に対して親切にし、その活動の結果は、やはり社会の問題に深く切り込んだようなものにはなりにくいと感じることに気付かされる。また、「ビクトル」を窓として、スペインの子供達の状況やスペインの社会の状況を知ることができるのである。今、「ズッコケ」と比べてみることで、このような「ビクトル」の鏡としての意味、窓としての意味を述べてみたわけであるが、「ズッコケ」のような比較する対象を持たなくとも、やはり子供達は「ビクトル」を読むことで、このようなことを漠然と感じるはずである。このような経験を積むことが、他人（外国）を知り、自分（自国）を知り、グローバル・シチズンになることにつながるのである。

これは、筆者の個人的で主観的な感覚であるが、外国人研究者と話していて、相手が同じ本を子供時代に読んだことがあると分かったら、まるで共通の言葉を得たような気がするし、その人が古い友人であるに思えてくる。国際児童文学は、世界の共通教養であるというよりも、さらに根本的な共通感覚を、私達に与えてくれるのである。

(3) 国際児童文学の読書の周辺

もう少し踏み込んで、子供に国際児童文学を読ませることには、どのような利点があるのかをとらえてみたい。Tomlinson(2002)は、次の11点を利点としている。要約して示す(4~6頁)。

- ・国際児童文学は、地理的・文化的ギャップに橋をかける。

- ・すでに児童文学は、国際的なものである。
- ・国際児童文学は、子供に他の土地(land)に住む仲間のことを教え、その国の人々、文化、伝統を知らせ、ステレオタイプを打ち消してくれる。
- ・他の土地の仲間について知ることは、幼い読者にとって、感情的にも認知的にも、多くの得ることがある。
- ・長い時間をかけて描写されてきた登場人物たちの毎日の生活における出来事(event)を解釈することは、センセーショナルに狭い範囲で取り上げられるテレビや新聞の出来事に比べより真実で(truer)あり、理解可能である。
- ・人の気持ちを動かさずにはおかない物語は、生徒の人々や読んだ場所に対する興味をかきたて、また、地理的歴史的内容をより深く理解し真価を認める道を舗装してくれるようなものである。
- ・原住民によって、あるいはそこに生きる人々によって書かれ研究されてきた国・地域の文学は、教室の教材に、正確さや確実性や国際的な見地を与えてくれる。
- ・国際的な著者はしばしば、アメリカ合衆国が議論したとらないが本当は子供や若者が知る必要がある問題に、しばしば向き合う。
- ・国際的な絵本芸術は新鮮できわだって優れている。
- ・国際文学は、私達の教室で見つけられる文化や言語の多様性を反映する。
- ・国際的な本とアメリカの本は、一緒に用いると、うまく扱える。単元学習や、読み聞かせや、独り読みなどの日常的な活動で使えば、文化の違いよりも似ているところを生徒に気付かせることができる。

様々な利点があるものである。下線から思い出されるのは、皇后陛下の美智子『橋をかける—子供時代の読書の思い出—』である。これは、皇后陛下が、子供時代の読書が子供にとってどのような意味を持つかについて、自分の経験をふまえて論じたものである。いろいろな本から人生の悲しみや喜びを知ったことを述べた後、子供時代の読書は「ある時には私に根っこを与え、ある時には翼をくれました。この根っこと翼は、私が外に、内に、橋をかけ、自分の世界を少しずつ広げて育っていくときに、大きな助けとなってくれました。」としている。

「橋をかける」ということについて、もう1点思い出すが、イェラ・レップマンの自伝『子どもの本は世界の架け橋』である。レップマンは、第二次世界大戦後のアメリカ占領下のドイツにおいて、米軍の顧問として、女性・子供の文化的・教育的問題の改善に取り組んだ。彼女が行った具体的な方策は、子供達の精神の栄養として、世界の本を集めて、展示会を開催することであった。彼女は、ドイツの敵国であったところも含めて様々な国々に手紙を書き、子供の本の寄付を依頼した。そうして、国際児童図書展が、ドイツ各地で開催された。レップマンのこの活動は、1949年の、ミュンヘン国際児童図書館の開催と、1951年の国際児童図書評議会(IBBY: International Board on Books for Young People)に結びつく。実は美智子皇后陛下の本は、IBBYの第26回世界大会における基調講演を収録したものである。このIBBYの活動は、これまで述べてきたような国際児童文学という視点を強く持って行われている。その活動内容は、IBBYのホームページによると、

- ・子どもの本をとおして国際理解をすすめること
- ・世界中の子どもたちが、文学的、美術的に質の高い本にめぐりあえるようにすること
- ・世界中、ことに発展途上国において、すぐれた子どもの本の出版や普及を奨励すること
- ・子どもと子どもの本に関わる人々を支援し、その能力を高める機会を提供すること
- ・児童文学関連の学術研究、調査活動を行うこと

である。このように、子供の本が国境を越えていくことは、先に取り上げた「国際児童文学」と同じ発想である。IBBYのホームページでは、「IBBYは、1990年に国連で批准された、子どもの権利条約(Convention on the Rights of the Child)の基本に則って活動しています。この条約の主要な宣言のひとつは、子どもが一般教育を受ける権利、また直接に情報に接しうる権利です。この条約は、すべての国に、子どもの本の出版

と普及に努力するよう呼びかけています。」ともしており、世界中に様々な国の子供の本が行きわたることは、人権という見地からも重要であることが分かる。

以上、国際児童文学の定義から始めて、国際児童文学という視点を得た時に、子供が本を読むということの意味をとらえてきた。このように、国際児童文学という視点からの読書指導は、子供の人権を守り、子供に世界をとらえる窓、自分をとらえる鏡を与えるものである。

3. 国際児童文学における翻訳の問題

(1) 児童文学の翻訳の難しさ

国際児童文学が子供に手渡されることを考える時、そこには、翻訳という避けては通れない問題が横たわっている。国際児童文学においては、どのような翻訳がよい翻訳なのか考察してみたい。イギリスの児童文学者の三宅興子は、「国というボーダーを越えることがそれほど困難ではない絵本の翻訳は、人生における文化交流の第一歩といえます。絵本の翻訳を成功させたいものです。」(三宅、2004、37頁)と述べている。

しかし、一方で三宅は、「絵本を翻訳する場合には、文章が短く平明であるために、翻訳は非常にやさしいと考えられがちですが、翻訳者は、絵本の形で表現された一つの世界の全体を、くまなく理解されることが要求されます。」という渡辺の文章を引用している(渡辺、『心に緑の種をまく』121頁、新潮社、1997)。なぜなら、「やさしい言葉ほど、文化により深く根をおろしているのではないか?」「やさしい言葉ほど、ひとつの文化で使われてきた歴史が、より長いのではないか?」(同書、127頁)と考えられ、別の文化圏の言葉に翻訳して表現することに困難がつきまとうからである。絵という助けがあったにせよ、若い読者を想定している児童文学の翻訳には、独特の難しさがある。先に触れたように、国際児童文学には「窓」の役割がある。自分とは異なる国の文化を伝える役割である。その時に、できるだけその国の文化を反映したものを伝えたいが、直訳をつきつけても若い読者に分かりやすく伝えることはできない。三宅は、「絵本に対する翻訳の態度は、できる限り、原本に近いものを(それは、印刷や判型も含めて考えるべきものですが)、読者に届けようとするのか、読者の属する文化に近いように翻案(または再話)して、受け入れやすく訳者が配慮するのか、の二極をゆれるでしょう。」(三宅、2004、42頁)と述べている。

(2) 『エルマーのぼうけん』の訳をめぐる

もう1つの問題は、上記のことと関連して、読者の年齢である。一般的に、翻訳された本の読者対象年齢は、オリジナルのものよりも上がってしまうことが多い。なぜなら、その文化の言葉を丸づかみに理解するのではなく、説明として翻訳されたものを、知識として理解していくという側面が強くなるからである。日本語に翻訳されたものでは、小学校6年生ぐらいが適切であると思われる本が、現地では、4年生ぐらいに最も読まれているということがよくあるのである。ところが、オリジナルと同じか、もっと低い年齢の子供にも読めるようにと工夫された翻訳書もないわけではない。ここで、国際児童文学の翻訳としてすぐれている1つの例を取り上げてみたい。ルース・スタイルス・ガネット『エルマーのぼうけん』(ルース・クリスマン・ガネット絵、渡辺茂男訳、1963年、福音館書店刊)である。

岩澤(2006)の分析では、この本は、以下のような工夫によって、読者対象年齢を下げている可能性があるという。なお、本文にはふりがながついていないが、ここでは省略する。

ア 書名『エルマーのぼうけん』(原題は **My father's dragon** で「ぼくのおとうさんのりゅう」、エルマーは語り手の父にあたるが、主人公の名前にしたことで作品に感情移入がしやすいようなる。また、「ぼうけん」とつけることで続編との混乱を避け、わくわくした感じを与えている。)

イ 裏表紙の地図上「ぴよんぴよこいわ」(原語は **ocean's rock** で「海の岩」、より親しみの持てる愛称となっている。)

ウ 8頁9行目「なきたくなるほど、かなしいものをみたくてでございますよ。」(原語は、…**the made me want to weep**. 「(that は)私を泣きたい気持ちにした。」だが、**weep** は嬉しい時も悲しい時も用いる。訳では、それが悲しいものであることを明示して、読みやすくなっている。)

エ 32頁6~7行目「エルマーは、まえのいわの上をいきおいよくはしって行って、えーいっ と、ばかりつぎのいわにとびうつらなければなりませんでした。」(原語にはない、「えーいっ と、ばかり」

が付け加えられている。)

オ 33 頁 10 行目「どうぶつ島の上に、ぴょん と、とびうつることができました。」 (原語にはない、「ぴょん と」が付け加えられている。)

カ エルマーがくしゃみをするところで、原語にはない、「はっくしょい」という言葉が付け加えられている。

キ 105 頁 3 行目「ジャングルの中のさるのなきごえが、ぱたっと、とまって、はてなっとおもうまに、」となっている。原語にはない、「ぱたっと」「はてな」という言葉がつけ加えられている。

ク 原作では 140 の形式段落を、日本語訳では 272 と 2 倍に増やしている。段落を多くすることでページに空白が多くなり、読みやすくなる。

さらに、岩澤は、次の点で原典と訳が異なっていると指摘している。岩澤身は原典の表現がおもしろいとして取り上げているのであるが、これらも、より簡潔に分かりやすく伝えるために行った訳の工夫だと考えられるであろう。

ケ 33 頁 8 行目「エルマーは、七じかんも、いわからいわへ、すべったり、とんだりしましたが、まだあかるくならないうちに、いちばんしまいのいわから、どうぶつ島の上に、ぴょん と、とびうつることができました。」 (原語では、“…he finally reached the very last lock…” (彼は、ついに、やっとの思いで最後の岩に到着した。) とある。“finally”と“very”から、ついに、やっとの思いで、本当に苦勞して到着したことが分かるが、これを「ぴょん と」という擬音を用いたり、「とびうつる」という表現にしたりしたこと、エルマーがかかるがと冒険してきた感じが出てくる。岩澤はこのことを「日本語版のエルマーの方が、より『超人的エルマー』となっている印象を受けた。」としている。)

コ 88 頁 13 行目「なまえは、エルマー・エレベーターで、しょうばいは、たんけんか…」 (これは、ゴリラがエルマーに対して、10 数えるまでに名前と商売 (仕事) を言うように要求する場面である。原語が“Elmer Elevator, Explorer.” (エルマーエレベーター、探検家) となっているのに対して、日本語では分かりやすく「なまえは」「しょうばいは」と付け加えている。)

つまり、訳者である渡辺は、できるだけ幼い子供達に分かりやすくするように、簡潔に、しかし時には擬音や説明を加えているのである。『エルマーのぼうけん』は日本でも大人気の子供の本である。渡辺は、アメリカのウェスタン・リザーヴ大学大学院を出た後、ニューヨーク公共図書館に司書として勤務した経験を持つ。その時に、『エルマーのぼうけん』に出会っているのだが、この本の訳について、次のように語っている。

私は、ニューヨークやクリーヴランドの図書館の児童室や小学校で、ブックトークの時間に、いつでもこの本を読んでいたもので細部を暗唱できるほど、物語になじんでいました。

ところが、いざ翻訳にとりかかってみると、りゅうの子どもをはじめ、かめや、ねずみや、いのししや、とらや、さいや、ライオンや、ゴリラや、わにのおしゃべりが、うまく日本語に訳せないのです。英語で、アメリカの子どもたちにすらすら読んでやることのできた物語が、日本語ですらすら語ることができないのです。英語で読むときは、ねずみとゴリラの違いは、ねずみとゴリラをイメージしながら音声を使い分ければいいのですが、日本語ではそうはいきません。男と女でしゃべり方が違うし、七十歳の老人と二十歳の青年と五歳の子どもは、同じしゃべり方はしませんし、文章に書いてみれば、歴然と違います。子どもの文学、とくに空想物語では、擬人化された動物の妖精や野菜や玩具などがしゃべります。原作が外国語で書かれていれば、多くの場合、これら登場人物の性別や年齢はわかりません。

こうなれば、訳者は経験と勘で勝負するしかありません。私は、英語で子どもたちに読み聞かせをしていた経験や、ストーリーテリングの勉強や実演をしていたおかげでとても助かりました。もっとさかのぼれば、小学校時代の国語教科書の朗読が役立ったのかもしれない。物語を読むと動物たちの声音が聞こえました。アメリカの図書館で仲良くなった子どもたちの顔が目に見え、くりかえしくりかえし読むうちにりゅうの子どもは、気のやさしい四、五歳の男の子とイメージがだぶりはじめ、声が聞こえてきました。それから先は、まるで自分が物語を書き下ろしているような感じで翻訳はすすみました。題名は、『エルマーのぼうけん』と訳しました。

……日本語に翻訳することによって、原作のたのしい味が、少しでも損なわれてはいけなと「ぼくのとうさん」の物語を語るように書きました。日本の子どもたちが読むんだから、翻訳くさい日本語になってはいけなと、原文の英語が頭のなかから、すっかり消えるまで翻訳原稿を寝かせておいて、くりかえし音読しては文章を直しました。

(渡辺、2007、269～271 頁)

このエピソードは、国際児童文学における翻訳に重要な点を指摘している。

- ・言語の構造の違いから、日本語に訳すときは、年齢などの想定をしなければならないこと
- ・子供達に読まれるためには、翻訳くさい翻訳ではいけないこと
- ・そのためには「音読する」作業が不可欠であること

などである。

(3) 『ひろしまのピカ』をめぐって

今度は、反対に、日本の児童文学が外国語に翻訳され、外国の子供達にとって、国際児童文学となっている例を挙げてみよう。

丸木俊による『ひろしまのピカ』(1980年、小峰書店刊)は、もとは日本語で書かれた絵本であるが、現在少なくとも16か国語に訳されているものである。ここでは、日本語の原文と、アメリカで出版された英語の翻訳文(翻訳者の氏名は不明)と、イギリスで出版された英語の翻訳文(Judith Elkin再話)を比較してみたい。

同じ英語と言っても、アメリカ版とイギリス版では、大変異なっている。初めに冒頭の3頁の文章を比較してみる。

原本(日本語) 3頁

その朝、ひろしまの空は、からりとはれて真夏の太陽は、ぎらぎらとてりはじめていました。ひろしまの7つの川は、しずかにながれ、ちんちん電車が、ゆっくりはしっていました。

アメリカ版(英語) 3頁

That morning in Hiroshima the sky was blue and cloudless. The sun was shining. Streetcars had begun making rounds, picking up people who were on their way to work. Hiroshima's seven rivers flowed quietly through the city. The rays of the midsummer sun glittered on the surface of the rivers.

イギリス版(英語) 3頁

Monday 6 August 1945 Hiroshima, Japan

It was almost 8.15.

The People of Hiroshima woke up to a beautiful bright morning. The sky was clear and the shallow rays of early sunlight glittered through the morning air.

On this summer day in wartime, work had already begun for many. The trams crossed and passed in an ordered, leisurely way. The seven rivers flowed quietly, gently southwards towards the sea.

アメリカのものは直訳に近い形であり、イギリスのものは、一種のルポルタージュのような形に再編されている。まず、「その朝」というのが、イギリス版では「1945年8月6日の朝、日本の広島で」という風に、説明が加えられている。また、それがほぼ8時15分であったと客観的な情報に変更されている。日本の読者は、原爆について既有知識を持っている。それが1945年8月6日であったこともである。しかし、イギリスの読者はそのことをあまり知らないであろうと訳者は考え、この情報を加える形で編集したのである。

次に4頁の文章について、検討してみたい。

原本（日本語） 4 頁

東京や大阪、名古屋など、たくさんの都会がつぎつぎに空襲をうけ、やけてしまいました。
 ひろしまだけがいちどもやられずにいましたので、「どうしたんじやろう」と、はなしていました。
 「いまにやられるで」といって、火がもえひろがるのをふせぐために、建物をこわして道をひろくしたり、水を用意したり、にげていく場所をきめたりしていました。
 みんな、どこへいくときも、防空ずきんをかぶり、すこしばかりのくすりのはいったふくろをもっていました。

アメリカ版（英語） 4 頁

In Tokyo, Osaka, Nagoya, and many other Japanese cities there had been air raids. The people of Hiroshima wondered why their city had been spared. They had done what they could to prepare for an air raid. To keep fire from spreading, they had torn down old buildings and widened streets. They had stored water and decided where people should go to avoid the bombs. Everyone carried small bags of medicine and, when they were out of doors, wore air-raid hats or hoods to protect heads.

イギリス版（英語） 4 頁

In the busy seaport of Hiroshima, the warning sirens had sounded but the city remained untouched. No bomb had fallen, no building had been burned. The people were becoming increasingly uneasy. Why had they been spared? For, in Tokyo, Osaka, Nagoya and many other large cities, the massed air raids of the American bombers had brought fire and destruction. The people of Hiroshima prepared for the expected attack. In a city where houses were built largely of wood, fire was the greatest fear. Many houses had been pulled down to make firebreaks, and water had been stored for fire-fighting. Wherever they went, the people wore their bokuzukin – padded cotton air raid helmets – and kept their medicine bags ready. It was early morning. The day was already hot in Hiroshima.

原本は、「どうしたんじやろう」「いまにやられるで」が広島の方言を用いた鍵カッコの会話文になっており、そこに生きる素朴な人々の疑問や恐れを象徴する。アメリカ版もイギリス版も、このような会話は意味的には取りこまれているが、間接話法になっており、方言や会話文になっていない。そのため、なぜ空襲に対する準備をするのかという説明や論理が強調されている。防空ずきんについては、アメリカ版もイギリス版もどちらも説明的である。

「建物」の訳については、アメリカ版は *old buildings*（古い建築物）になっているのに対し、イギリス版は *many houses*（たくさんの家）になっている。これでは、受け取る印象が異なってくるであろう。このように、国際児童文学における翻訳は、特に注意して説明や情報を提供しなければならないとともに、解釈を必要に応じて加えていかなければならない。

（４）国際児童文学における望ましい翻訳とは

以上、英語を原語として日本語に翻訳される場合と、日本語を原語として英語に翻訳される場合の 2 つを見てきた。これらをふまえて、国際児童文学における望ましい翻訳とは、次のようにまとめることができる。

- ・言語の構造の違いを超えて、翻訳語の叙情的な流れを大事にし、その文化に合ったものにする
- ・翻訳くさくない翻訳にするために、音読などを繰り返し、その言語に自然な調子に整える
- ・外国のことを知らない読者に、必要な説明を行う
- ・扱いやすさ・読みやすさに気を配りながら、外国の情報量のバランスを考える
- ・十分に検討したうえで、必要であれば、翻訳者自身の解釈を反映させる

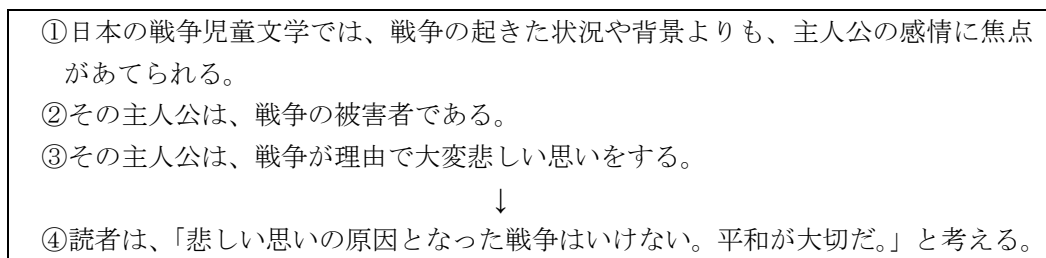
翻訳前の原本の所属する国や文化についてよく知っていることはもちろんのこと、翻訳する原語の構造、さらには、翻訳語を読む子供達のことよく考えられる人でなければ、国際児童文学のよい翻訳はできないのである。

4. 国際児童文学という視点での読書指導の例—戦争児童文学—

(1) 日本における戦争児童文学の受容

このように国際児童文学という視点を得ると、読書指導はどのように変わってくるのか。1つの例として、戦争児童文学に関する読書指導を取り上げてみたい。

おそらく、日本における戦争児童文学の受容過程は、次の図式で説明される。



どうしてこのような単純な図式で、戦争児童文学の受容が行われるのか、第18回国際児童文学学会研究大会で行われたシンポジウム「戦後日本の児童文学：アジアの中の日本」を手掛かりに、考察していく。

戦争児童文学についての読書指導を行う時に、まず考えなければならないのは、国語教科書における戦争児童文学教材である。目黒(2007)の研究では、1970年代半ばから増加した戦争児童文学教材が、子供達の戦争観に影響を及ぼしているという。これらは、戦争の記憶を持つ作家が、戦争体験のない子供に、「戦争の記憶」を伝達する媒介となっていることを意味している。さらに、目黒によると、戦争児童文学教材の特徴は、「被害者としての立場」が強調され、「加害者としての立場」がほとんど描かれないうことにあるという。目黒の書いたシンポジウム報告を引用する。

「被害者としての立場」が典型的に描かれているのは、空襲、とりわけ原爆投下による被害が描かれた作品である。「川とノリオ」では、主人公の母親が原爆によって亡くなっている。

戦争児童文学教材では、銃後の担い手である母親が焦点化されることがある。「お母さんの木」では、七人の息子を徴兵された母親の母性愛が描かれている。これらの作品では、徴兵された息子や夫が戦場で人を殺している可能性について言及されることはほとんどない。

戦争児童文学教材には、戦争と自然とを対比させる作品が少なくない。「一つの花」・「川とノリオ」・「お母さんの木」の題名に自然を象徴した語が含まれていることからもうかがえよう。これらの作品では、自然が強調された結果、戦争の人為的側面の印象が相対的に弱くなっていると思われる。「母性」と「自然」が組み合わさることで、「被害者としての立場」が一層強調されることが懸念される。

それでは、「加害者としての立場」はどのように描かれているのであろうか。結論を先に述べるならばほとんど描かれていない。

たとえば、兵士に代表される戦闘的な男性はほとんど登場しない。「一つの花」に登場する父親は、徴兵されているにもかかわらず、虚弱な男性として設定されている。日本兵の加害行為は描かれず、コロニアリズムというテーマが周到に回避されているといえる。

(目黒、2007、37頁)

しかし、児童文学者の目黒が恐れるのは、戦争児童文学に「加害者としての立場」が書かれていないことではない。むしろ、「被害者としての立場」の強調が、ナショナリスティックな共感を喚起することや、戦争児童文学教材を反戦平和思想の伝達手段として用い、イデオロギー装置として位置づける点で教条主義的で

あり、子どもたちの主体性を軽視しているということである。そのため、目黒は次の3点を提案している。

一つ目は、戦争児童文学教材の多様性の保証である。現代児童文学の新たな成果が教科書に反映されることが期待される。

二つ目は、戦争児童文学教材の解釈の多様性の保証である。戦争児童文学教材が「戦争の記憶」を与える手段ではなく、「戦争の記憶」の解釈を促す多義的なテキストとして位置づけられる必要がある。

三つ目は、次世代による戦争児童文学作品の創出である。多様な戦争児童文学教材を通して「戦争の記憶」について批判的に思考する機会が保証されたならば、次世代を担う子どもたちによる新しい戦争児童文学作品の創出が期待できるからだ。

(目黒、2007、38頁)

この提案は逆に言うと、①戦争児童文学教材には多様性がないこと、②戦争児童文学が「戦争の記憶」を与える手段として一義的に解釈されていること、③戦争児童文学の作家が「戦争の記憶」を持った世代に限定されていることを示している。つまり、作家が戦争の記憶を被害者として持った世代で限定されているがゆえに、その作品は、被害者の立場からの戦争の記憶を伝え、それがいかに悲惨であるかを強調し、平和を希求する解釈しか許さないような構造を持ってしまっているのである。

奥山(2007)は、戦争児童文学を書く作者は、子ども・青年時代に戦争を体験しているが、読者である子どもの方は戦争は未体験であることを指摘している。「戦争の悲惨さやむごさばかりを強調すれば、子ども読者を『こわい』『読みたくない』という気持ちにさせてしまう。そのため、戦争というシリアスなテーマであっても、子ども読者がおもしろく、わかりやすく読めるように表現方法の多様な試みがなされてきた」という。基本的には、シリアスすぎるテーマであるがゆえにフィクションの形がとられ、探偵小説風の展開、パラレルワールドの手法、挿し絵がマンガ風、SF小説・冒険小説的、意外な結末といった実験的な手法が用いられてきた。しかし、その手法の多様性と相反して、書かれる内容は偏ったものになっているのではないかと考えられる。奥山自身も、「本来ならアジア地域の関係性こそ戦争の重要な要因であったにもかかわらず、残念ながら「アジアの中の日本」という視点をもった、しかも魅力的な「戦争児童文学」はなかなか見あたらない」と述べている。その原因として、①日本の戦争児童文学は、原爆・大空襲・食糧難・軍隊・学童疎開などの被害体験をテーマにすえた作品が多数であること、②加害の問題に迫った作品が少数であり、読まれていないこと、③加害の作品は「たたかい」の物語になってしまうこと、を挙げている。

奥山は、日本の戦争児童文学の発展を考えているので、日本における近年の試みを二つ紹介しているのだが、筆者の課題意識は違うところにある。「国際児童文学」という視点に立てば、解決すると考える。つまり、外国における児童文学を日本語に翻訳して読ませれば、「アジアの中の日本」という発想を読者に持たせることができるはずである。

(2) 外国における戦争児童文学の受容

先のシンポジウムにおけるもう1人の発表者の成實(2007)の発表を紹介してみたい。成實は、日中比較児童文学という視座からの提案を行っている。それによると、日本の戦争児童文学と中国のそれとはずいぶん異なるようである。

中華人民共和国の児童文学の中で、アジア・太平洋戦争を素材とした「戦争児童文学」は、日本のものとはまったく違う様相を見せる。一言でいえば、それは侵略に立ち向かう「抗戦児童文学」のことであり、つまりは「抗日児童文学」と同義となる。それはもちろん中国におけるアジア・太平洋戦争の記憶とは、一九三一年の満州事変以降、連綿とつながる日本の侵略の歴史のことを指すからであり、そのため、これを素材として紡がれる物語は、自然と侵略の非道さを糾弾し、日本に抗った民族の英雄をたたえる物語となっていくからである。

(成實、2007、39頁)

そして、成實が分析したのは、中国の建国直後から文化大革命までの17年間に執筆され、中国共産党の闘争を描きだした小説・児童文学・映画（これを「紅色経典」と呼ぶ）である。紅色経典の多くは、主人公の中国人少年が、苦労を重ねながらも、知恵と勇気を絶やさず、立派に成長していく姿を書いたものである。そして、紅色経典の原型になった作品についても言及しているのだが、そのうち、徐光耀『わんぱく兵チャンカ』という作品について、取り上げてみよう。『わんぱく兵チャンカ』は、主人公チャンカという少年が、日本兵亀田に祖母を殺害され、復讐を誓い、中国共産党に身を投じ、スパイとして見事な活躍をする。機知に富み、勇敢で、党に忠実なチャンカは、「紅色経典」における登場人物の典型となった抗日小英雄である。そこで、この亀田という日本兵の書かれ方が特徴的である。奇妙な日本語混じりの中国語を話し、醜い外見をしており、粗暴な振る舞いをし、愚か者で、チャンカに簡単にだまされて死んでしまう。いかにも「悪役」と分かる書かれ方である。

亀田は、多くの「紅色経典」に登場する日本兵と共通する特徴を持っており、ステレオタイプな描かれ方をしている。このような日本兵の描かれ方は、当然のことながら、侵略時の日本兵の姿をもとに書かれていることは間違いない。日本の戦争児童文学が、「被害者としての立場」を描きながらも、具体的な敵を描けていないことと対照的である。太平洋戦時下の日本において、沖縄を除けば、子供や青年であった日本の戦争児童文学の作者が敵に遭遇する場面がなかったのであるが、紅色経典の作者達は、具体的なはっきりとした、あるいはステレオタイプ化した敵を描くだけの情報を、自らの経験として持っているのである。

成實はこのことについて、以下のように述べている。

しかしどのように愚かしい道化役であったとしても、これらの作品において、「敵」である日本人に具体的な「顔」が与えられているということは注目に値する。これは日本の多くの「戦争児童文学」において、「敵」が何であるかということが総じて曖昧にしか描かれていないことと極めて対照的であると言えるだろう。

むしろそれは互いの国における戦争の記憶の差異によるものである。中国の「紅色経典」における日本兵の形象が、実際に現地で侵略者としての日本兵と対峙した経験を基に作り上げられたものであるの言うまでもなく、いきおい中国における「戦争児童文学」は、「侵略者」の姿や行為のものを記憶することが目的となり、それゆえ「敵」たる日本人は「顔」を持つ存在として描かれることとなったのである。

（成實、2007、41頁）

このように、中国における戦争児童文学と、日本における戦争児童文学は、その内容も受容の仕方も、大きな違いがある。多くの日本人は、中国の児童文学におけるこのような日本人像の描かれ方を知らないままであろう。

筆者がこのシンポジウムを大学で紹介した時、ある大学院生は次のように述べた。

たしかに日本の戦争被害者としての側面ばかり見てきた。このことに気付いていなかったことが恥ずかしい。歴史認識を深めるためにも、加害者としての日本について知りたい。

この大学院生は元来読書家であり、非常に優秀な成績を収めており、他人からは国語教師に向いていると言われていた。その大学院生でさえ、「被害者としての立場」に偏っていることに気づいていなかったというところが、日本の戦争児童文学受容の実態を示している。教師の多くも同じような状態で、前述のような図式の戦争児童文学の受容が増幅されていると想像できる。しかし、この大学院生が言うように、多くの子供達は、偏っていると気づけば、「加害者としての立場」についても知りたいと考えるであろう。そのためには、国際児童文学という視点を取り入れた読書指導が有効である。外国における戦争児童文学を翻訳するという形で読むことで、読者は「被害者としての立場」と「加害者としての立場」のバランスをとることができる。さらには、戦争の原因や背景について認識を深めることができる。このことについて、次に具体例をあげて

検討する。

(3) 国際児童文学を取り入れた読書指導の実際

戦争児童文学というジャンルで国際児童文学という視点を取り入れるにはどうすればよいであろうか。1つ手がかりになるのは、京都家庭文庫連絡会編の『きみには関係ないことか—戦争と平和を考えるブックリスト'97~'03』というブックリストである。ここには、約300の本が紹介されているのだが、約4割以上が「国際児童文学」に該当する。また、それ以外の日本人が日本の子どもに書いたものであっても、外国に取材したものが多く、国際児童文学的な発想がある。それぞれ表紙の写真と書誌情報（著者・訳者・絵や写真の提供者・出版社・出版年・価格）と6行の要約がついており、様々な側面からグルーピングされている。目次を引用する。

はじめに

リストを利用する方へ

第1章 今、世界で何が起きているのか

イラク戦争・アフガン侵攻

湾岸戦争・コソボ侵攻・ベトナム戦争・カンボジア侵攻

宗教・民族を巡って

戦争後も続く地雷の被害

核がもたらすもの

今なお存在する米軍基地

韓国・北朝鮮との関わり

貧しさと差別の中で

■コラム

映画「アレクセイと泉」

劣化ウラン弾の恐怖

沖縄への視線を問う

沖縄を取材して作品を生み出す

韓国の徴兵制度

インドの少女たちとともに

映画に見る子どもと戦争

◆アメリカの移民に関する年表

特集・「戦争するアメリカ」ってどんな国？

■コラム

現代アメリカの子どもたちの生活

第2章 過去を忘れない

日本の戦争

被爆国からの伝言

ヨーロッパの戦争

■コラム

『ハテルマシキナ』を読んで

黒田征太郎とのコラボで生まれ変わった 野坂昭如「戦争童話集」

『少年H』に憤る山中恒氏

世界にはばたくサダコの物語を知っていますか？

アイルランドが近くなる

第3章 戦争を起こさせないために

戦争はなぜ起きる

いろいろな国 いろいろな生きかた
 平和な暮らし
 平和をつくる人々
 平和のためのしくみ 国連と日本国憲法
 資料編——調べたいときに

■コラム

カンボジアとの国際交流
 平和を学ぶためにすすめたい本 2冊
 国が配らないなら、ぼくが配る

関連年表

索引

参加者一覧・編集委員

おわりに

様々な角度から「戦争と平和を考える」本を紹介していることが、この目次から推察できる。さらに詳しく各章を見ていく。

第1章は、過去の戦争（特に第二次世界大戦）のことではなく、現在各地に起こっている戦争に焦点を当てている。目次にあるように、イラク戦争・アフガン侵攻・湾岸戦争・コソボ侵攻・ベトナム戦争・カンボジア侵攻だけではなく、現在も続く戦争後の状況や戦争の原因となる状況をレポートする様々な本を取り上げている。たとえば、「宗教・民族を巡って」という節には、イスラエル、クロアチア、ブルガリア、ポーランドなどを舞台にして、長い歴史の中で繰り返し起こってきた宗教・民族の違いからくる紛争について書かれた本が紹介されている。「韓国・北朝鮮との関わり」の節には、朝鮮から日本へ強制連行された人々のことや、北朝鮮から脱出した人々のことを書いた本がある。また、「貧しさと差別の中で」という節には、タイ・インド・メキシコ・アフガニスタン・アフリカなどの国々の子供の生活実態を取り上げた本が並んでいる。戦争児童文学といっても、フィクション仕立てのものばかりではない。写真集のようなものもあれば、社会的・知識的な本や絵本もある。

特集『戦争するアメリカ』ってどんな国?』には、戦争を理解させる本ではなく、戦争のもととなる国の成り立ちから現状までを様々な側面からとらえた本が並べられている。このような本を読ませることが、国際児童文学という視点からの読書指導では可能である。お互いの外国について知った子供が成人すれば、これまでとは違った平和や国際協調が、開拓されるのではないだろうか。

第2章では、過去におこった戦争について書かれた本を取り上げている。「日本の戦争」は、日本の戦争児童文学が取り上げてきたテーマであるが、この節の冒頭には「かつて日本が仕掛けた戦争は、侵略戦争でした。(中略)」となっており、満州のことや、ビルマのインパール作戦、慰安婦問題のことなど、「加害者としての立場」のものも取り入れられている。その中で紹介されている『父の過去を探して—坂東ドイツ俘虜収容所物語—』(安宅温、1997年、ポプラ社刊)は、第一次世界大戦中、徳島県鳴門に実在した、ドイツ兵俘虜の収容所の話である。「ヨーロッパの戦争」の節には多くの国際児童文学があり、第二次世界大戦だけではなく、古い宗教迫害や政治的迫害を描いた作品が多数含まれている。

第3章では、様々な角度から、様々な本が取り上げられている。なぜ人間は戦争を起してしまうのかという根本的な問に答えようとする絵本も見られる。また、レナード・バーンスタイン、ネルソン・マンデラ、マザー・テレサ、マーティン・ルーサー・キングといった、一見戦争と関係のない人物の伝記などが挙げられているのも目をひく。政治や人権に関する本も取り上げられている。この章も国際児童文学の割合は高い。

各種のコラムは、このリストに厚みを増す情報を掲載している。例えば、本という媒体だけでなく映画について言及していたり、日本ではあまり知られていないが外国では有名な原爆症で死んだ少女サダコについて書いてあったりしている。

以上のように、このリストは多角的に戦争と平和を考えるための本を紹介するものとなっている。もう 1

度、目黒の提案を振り返ってみたい。このリストを全体として見ると、目黒の提案について、次のことが言える。

①このリストでは、戦争児童文学の多様性が保証されている。扱われている戦争の種類も、その扱われ方・論じ方も多様である。

②このリストに取り上げられた本には、戦争児童文学の解釈の多様性が保証されている。これらの本は、「戦争の記憶」を与える手段としてだけではなく、「戦争の記憶」の解釈を促す多義的なテキストとして位置づけられる。たとえば、「宗教・民族を巡って」に取り上げられた本を読めば、読者は「戦争の記憶」を「宗教」「民族」という異なる視点からの解釈でとらえることになる。

③このリストに取り上げられた本を書いている作家達は、第二次世界大戦を体験して「戦争の記憶」を持った世代に限定されていない。したがって、読者は、戦争体験世代の「戦争の記憶」を批判的に思考する機会を得ることができる。

また、奥山の論も振り返ってみたい。「韓国・北朝鮮との関わり」や「今なお存在する米軍基地」の節で取り上げられている本からは、アジアの中の日本という視点が浮かび上がってくる。朝鮮から強制連行された人々の世代交代を扱っているなど、加害の問題に踏み込みながらも、「たたかい」の物語にならずに済んでいるものも散見される。

目黒・奥山は日本児童文学研究者であるから日本の児童文学を改革していくことに関心があるが、筆者は読書指導研究者であるから、日本の子供達がどのような本を読み、どのように考えていくことができるかに関心がある。国際児童文学という視点からの読書指導として、このリストに掲げられている本を読ませれば、日本の児童文学の改善を待つまでもなく、彼らが望むようなこと一すなわち多様に読ませ多様に考えさせ、広い視点を得る一が行えるのである。

国際児童文学という視点からの読書指導は、必ずしも戦争や平和だけを考えるものではない。国際児童文学は、どのようなものであっても、外国に起きていることや起きていたことを知らせてくれる。そして、読者は、その読みを通して、自分の立場の偏りを是正したり、自分の立場を相対化したり、多様な解釈を行ったりする。これが、他国の有り様を知る「窓」・自国の有り様を見直す「鏡」としての国際児童文学の機能である。このような読書経験を経た読者は、単純に自分が被害者であると思ひこむような人間ではなく、他人にも思いをはせながら自分の有り方を探るグローバルシチズンになっていくのではないだろうか。よりよい児童文学を日本の作家から出版させることも重要であり、そのことを望むが、優れた日本の児童文学を子供に受容させていくことだけが国語教育の任務ではない。国際児童文学という視点を取り入れた国語教育の展開も考えられる。その1つの方法として、本稿では、国際児童文学が取り上げられているリストを用いた読書指導を論じた。

5. おわりに

本稿では、国際児童文学の定義、国際児童文学に関する翻訳の問題を検討したのち、国際児童文学という視点から読書指導を考えなおしてみると、読書指導が変化するということを、戦争児童文学を事例として取り上げた。今回は、国際児童文学という視点に焦点をしばったために、読書指導の中でも素材論に話が限定された。「国際児童文学を取り入れた読書指導の実際」という見出しをつけながらも、どのような読ませ方が国際的であるかとか、外国に取材したどのような読書指導方法がありうるかといった指導方法論には踏み込めなかった。しかし、諸外国の読書指導と日本の読書指導を比べてみる前提として、「国際児童文学」という視点を提示することが重要あり、その目的を達することはできたと考えている。

今後は、視点の提示にとどまらず、具体的な作品に基づく原作と翻訳の比較検討や、指導方法論に踏み込んだ国際児童文学という視点からの読書指導を考えていきたい。

付記

本稿は、国際読書学会第22回世界読書会議におけるシンポジウムと、五大学国語科教育学合同研究会によ

る発表をもとにまとめたものである。

文献

- 足立幸子(2000)『「読書へのアニメーション」導入の意義』山形大学教育学部附属教育実践総合センター『山形大学教育実践研究』第9号5～13頁
- 足立幸子(2004)「リテラチャー・サークル—アメリカの公立学校のディスカッション・グループによる読書指導法」山形大学教育学部附属教育実践総合センター『山形大学教育実践研究』第13号9～18頁
- 岩澤愛(2006)『「エルマーのぼうけん」原作との比較』新潟大学教育人間科学部国語教育専修読書指導ゼミ夏合宿発表資料
- 京都家庭文庫地域文庫連絡会編(2004)『きみには関係ないことか—戦争と平和を考えるブックリスト'97～'03』かもがわ出版
- レップマン, J、森本真実訳(2002)『子どもの本は世界の架け橋』こぐま社
- Meguro, T. (2007) An ideological consideration with reference to children's war literature used as teaching materials in Japanese studies textbooks of elementary schools. Paper presented at the 18th Biennial Congress of International Research Society for Children's Literature in Kyoto, August 25-29, 2007.
- 目黒強(2007)「小学校国語教科書における戦争児童文学教材をめぐるイデオロギーの検討」日本児童文学会『児童文学研究』第40号36～38頁
- 美智子(1998)『橋をかける—子供時代の読書の思い出』すえもりブックス
- 三宅興子(2004)「講演：絵本の翻訳と文化の根っこ」『絵本学』第4号37～47頁
- Narumi, T. (2007) The dilemma of children's literature in Asia: from the viewpoint of children's literature, a Sino-Japan comparison. Paper presented at the 18th Biennial Congress of International Research Society for Children's Literature in Kyoto, August 25-29, 2007.
- 成實朋子(2007)「アジア児童文学としてのジレンマ—日中比較児童文学の視座から—」日本児童文学会『児童文学研究』第40号39～42頁
- Okuyama, M. (2007) Reassessing methodologies of depicting war: Directing children toward an understanding of country and locality. Paper presented at the 18th Biennial Congress of International Research Society for Children's Literature in Kyoto, August 25-29, 2007.
- 奥山恵(2007)「戦争を描く方法を見直す—子どもに向けて国と地域を物語る意味—」日本児童文学会『児童文学研究』第40号32～35頁
- Tomlinson, C. M. (1998) *Children's books from other countries*. The Scarecrow Press, Inc.
- Tomlinson, C. M. (2002). An overview of international children's literature. In S. Stan (Ed.), *The World through Children's Books*. Scarecrow Press, Inc.
- 渡辺茂男(2007)『心に緑の種をまく』新潮社
- Yokota, J., Jorenby, M., Adachi, S., and Teale, W. (2007) One Japanese original text, multiple English versions: Critical discourse analysis of Hiroshima no Pika and differences in impact on reader response. Paper presented at the 18th Biennial Congress of International Research Society for Children's Literature in Kyoto, August 25-29, 2007.
- Yokota, J., Teale, W., and Adachi, S. (2008) International children's books: Bridges across cultures and countries. Paper presented at the International Reading Association 22nd World Congress on Reading in San José, Costa Rica, July 28 - 31, 2008.

(平成21年3月23日受理)